

Program Note

大澤壽人先生について

大澤壽人（おおさわ・ひさと、1906-53）先生は神戸市生まれ。父、壽太郎氏は神戸製鋼所創設に関わった実業家。関西学院高等商業学部卒業の1930年渡米。ボストン大学、続いてニューイングランド音楽院で学び、本格的に作曲の道を志す。室内楽作品や交響曲・協奏曲などの演奏会用大作に取り組み、1933年には元駐日大使の後援で自作演奏会を開くなど、将来を嘱望された。1934年パリに渡り、晩年のデュカと名教師ブーランジェに師事。翌年にはコンセール・パドルー管弦楽団を自ら率いて《交響曲第二番》《ピアノ協奏曲第二番》を発表し、大成功をおさめる。1936年に帰国した後は神戸女学院の教壇に立つ傍ら、ラジオ用放送音楽・舞台・映画から校歌に至る幅広いジャンルの作品を創作、そして指揮。作曲・編曲を合わせ、800曲以上を遺して急逝された時は音楽学部教授であった。近年代表作のCDがリリースされて、再評価が高まっている。

「大澤壽人遺作コレクション」と神戸女学院

大澤先生の遺された膨大な資料は、2006年8月、ご長男壽文氏より神戸女学院に寄贈された。段ボール43箱に及ぶ内容は、自筆楽譜・演奏会用ポスター・プログラム・創作ノート・作品表・録音テープから書簡・写真・指揮棒に至る貴重なものばかり。これらの資料群は「大澤壽人遺作コレクション」と名づけられ、学院の宝となった。ことに自筆譜は、総譜だけでも1万枚超という圧倒的な量を誇り、スタッフと卒業生ボランティアによって整理・編纂され、2007年12月『煌きの軌跡—大澤壽人作品資料目録一』が、クラブファンタジー全額支援のもとに刊行された。

大澤先生と神戸女学院は当然のことながら関係が深い。代表作の一つとされる《交響曲第三番 建国交響曲》と《ヴァイオリン小協奏曲 支那詩》は、帰国翌年の1937年に作曲され、ご自身の指揮によって初演されたが、この記念すべき「大澤壽人作曲指揮交響演奏会」は、神戸女学院同窓会めぐみ会東京支部の主催で開催された。

また、上記コレクションに含まれる種々の演奏会プログラムや録音記録には、岡田晴美クラブファンタジー会長(M67)をはじめとして、野崎住子(M43、当時教員)・故下里智恵子(M49、当時教員)・畑きみ子(M58)・故豊田壽子(M61)・安見泰子(M66)等の会員名が見られ、外部での音乐会には教え子を演奏者として起用するなど、師弟関係が教室の枠を越えて拡がっていたことを示している。

大澤壽人《ピアノ協奏曲第一番 イ短調 二台のピアノ用編曲》 (1933年)より 第2・3楽章

《ピアノ協奏曲第一番 イ短調》は26歳の作品で1933年5月に完成し、卒業作品としてボストン大学に提出された。《交響曲第一番》や、指揮者クーセヴィツキに捧げられた《コントラバス協奏曲》と共に、留学期を代表する大作である。両親に宛てた書簡の中では、ピアノ協奏曲を作曲することへの大きな意欲が示されており、作品は昭和初期に創作されたとは思えぬ先鋭な響きとスケールの大きさとを併せ持つ。異国で「どこまでもやり遂げる覚悟」と決意を述べる、若き作曲家渾身の作といえよう。同年10月、作曲者によって二台のピアノ用に編曲された全3楽章から、第2・3楽章を演奏する。

第2楽章：ややゆっくりと 優雅に

冒頭、ピアノ独奏によって三全音を組み合わせた動機が提示された後、日本的な旋律が奏される。祭り囃子の断片のような旋律も登場し、徐々に華やかさを増していく。

中間部は静かに始まるが、第1ピアノが両手のユニゾンで五音音階の上行を始め、やがて2台の掛け合いとなる。冒頭の動機が戻る再現部では、第1ピアノが細かい音符やダイナミックな動きで広い音域をかけ巡る中、2台共に高度な技巧が要求される。

楽章を通して、西洋的で抽象的な三全音と日本の多種の五音音階が両極を成している。意外にもそれらはドビュッシー的な全音音階でつながれているため、日本の響きも素では聞こえない。初期とはいえ、既に個性的な作風を感じさせる独自の作曲法である。

第3楽章：間奏曲と終曲

中庸の速さで 神秘的に～きわめて速く 活気をもって

最弱音に始まる「間奏曲」は低音部要所でラとミが鳴り、イ短調の構造を明らかにして終曲を導く。3拍子の軽快な主題を持つ「終曲」は5つの部分に分かれ、間に5拍子と4拍子の部分を挟んで、A-B-A-C-Aロンド形式の型をもつ。活発なリズムが息づく中、次々と楽想が繰り出され、エネルギーッシュな楽章をグリッサンドが締めくくる。

* 《二台のピアノ用編曲》の日本における演奏記録は現在見つかっていない。本日の演奏者は、大澤先生の自筆譜整理と電子化に携わっているスタッフで、作品と間近に接し音楽的薰陶を受けた。完成から75年の歳月を経た今宵、本邦初演させていただく。